慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済哲学の根本問題（二）
Sub Title	Herbert Schack, "Grundprobleme der Wirtschaftsphilosophie (II)" Schmollers Jahrbuch, Jahrg. 71 Heft 3. 1951, S. 41-62.
Author	服部, 成三郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.2 (1953. 3) ,p.217(61)- 220(64)
JaLC DOI	10.14991/001.19530301-0061
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530301-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

演ずる」(A.a.O.)とみていいであろう。このような原始林採取林業の最劣等地の木材が市場價値を規定している條件のもとに人工造林が出現して來、それが「同一立木量にはるかに少ない時間で充分とさせる」(一四〇頁)ものであるとすれば、その人工造林業の勞働は「强められた勞働 (Potenzierte Arbeit)」として作用し、同一の勞働時間にヨリ大なる價値を造り出す (A.a. O., 1/2, S. 333) のである。「人工造林の生產力は非常に高い」(一六八頁)ということはこのような意味に解せられなければならない。石渡氏は、人工造林資本の回轉期間の「無類の長期性」によつて、人工造林業立木の生產價格は價値以上はるかに高いというが、それは「人工造林の資本の有機的組成が甚だ低位であるに拘わらず、實質上經濟的には無類の高度な資本の有機的組成と同一意味をもたせてしまう」(一四三頁)からであつた。そしてそのことは資本の回轉度數が少ないため一定期間内にヨリ少ない個別的利潤率しか齎らさないということの結果であつた。しかしそれは剩餘價値率を一定として考察した場合であつたのである。ところが、剩餘價値率が變化することによつても個別的利潤率は變化する。人工造林業における勞働が「强められた勞働」として作用すれば、その剩餘價値率は增大する。それ故に「資本の回轉の長期性」が高度な資本の有機的組成と同一意味をもたせる」とすれば、他方において剩餘價値率の增進は資本の有機的構成の低いのと同樣の意味をもたせるのである。從つて人工造林の資本の回轉の「無類の長期性」によつて、直ちにその生產價格が價値以上であると斷定することは出來ない。そのような斷定をなすことは、林業における市場價値の決定權が原始林の最劣等地にあることを見失い、「三範疇の林業の同時的存在の構造を明確にしてゆくこと」を不可能にし、林業における絕對地代成立の基礎を見失い、從つてまた土地所有のもつ意義を過小評價することとなるであろう。

(附記)　本書は、七章(三〇〇頁)より成り、日本の林業地代は第五章、第六章で論じられているが、ここでは紙數の關係上、主として「第三章　抽象的形態としての林業地代法則」にしか觸れられなかつたことを諒とされたい。

紹介

經濟哲學の根本問題 (一)

(Herbert Schack, "Grundprobleme der Wirtschaftsphilosophie. (II)" Schmollers Jahrbuch, Jahrg. 71 Heft 3. 1951, S. 41—62)

服部成三郎

(五)　經濟形體

ゲーテは形態學を、現象の生起した原因を問うのみならず、その不可缺の條件を探る學、乃ち外的狀況の法則を求めるのでなくて、內的實相の法則を求める學と見做した。多くの歷史家や社會學者達が、此の考を繼承して、文化形態學の基礎付けに努力して來た。更にもう一つ他の意味が、此の文化形態學に附與される事がある。と云うのは、一時代の諸々の文化領域の中には、一貫した樣式が觀取されるが故に、之を型的、特性的に捉えるのがその課題であるとなす見解が存するからである。シュピートホフが、その直觀的理論の中心點に置いたのは、此の考方である。

併し、哲學の立場は、夫々の時代、夫々の文化期に對する、經濟哲學の根本問題

樣式描寫にとどまる事を許さない。むしろ經濟形體自身の、本質的必然的條件を探究する事を命ずる。經濟一般というものは如何にして形成せられるかが、根本問題なのである。經濟とは、人間の目的手段聯關を意味するというが、此の場合目的のあり方は多種多樣であり、人間の一般的目的意識の一環として認識さるべきである。乃ち、人間の生活體驗は、一つの主觀・客觀體として存在する。(そもそも客觀的といわれるものも、人間の主體的能力を離れては考えられないのではあるが、尙、我々は、狹義に於る〝主觀的なもの〟を、自我の emotional な面を意味するものとして、又〝客觀的なもの〟をその rational な面を意味するものとして定義する。二つの意識態度が、經濟という事を考える上に決定的に重要である。前者は人間が、表象を通じて、自己の體驗を、將來に結び付け、給養經濟を營まんとする情意的態度である。經濟の此の形體は、主として短期的、消費本位的傾向を意味する。經濟史的に、此の樣な主觀的、給養的意識態度が支配的であつた、極めて停滯的な場合を示す事も出來る。(舊著 "Wirtschaftsformen, Grundzüge einer Morphologie der Wirtschaft" 1927 參照)

客觀的意識態度は、悟性によつて攝われ、體驗的世界を諸關係のコンプレックスと見、關係の錯爭を解き概念を明瞭にし、遂には、事物を理解し、支配せんとする態度を意味する。此の面よりする經濟形體は、收益經濟であり所謂經濟原則と呼ばれるものの根底にある原理である。前者がゲマインシャフ

ト的社會に對應し、後者がゲゼルシャフト的社會に對應すると考える事も出來る。併し、資本主義社會に於ても、社會主義社會に於ても、此の二つの形體が、共に求められているのであつて、一方が缺ければ財の再生産過程が不可能となり、他方が缺ければ、勞働力の再生産過程が不可能となり、共に社會經濟は崩壞せざるを得ない。我々は此の二つの形體を、oder でなく、und に依つて捉えなければならぬ。有意義な經濟を營む爲には經濟目的に、此の二つの原理を結合させなければならない。斯る二つの經濟的目的聯關の綜合的な基礎付けが、經濟の構成という事にかかつて來る。

(六)　經濟の構成

凡そ、目的の決定の爲には、それを支持するところの價値觀點がなければならぬ。諸々の價値理念を持ち、利益關心を持つ人々が爭うとすれば、權力を持つ者が、それを實現させ、妥當なものと爲す事が出來る。一度反對の關心が支配するようになれば、正は不正となり、有意義なものは無意義とされる。從つて、經濟の構成の妥當性は或る階級利益の表現にかなう限りでしか求める事は出來ないとする考がある。マルクシズムは此の見地から、プロレタリアの利益を主張し、正、不正の觀點を拒否するが、その根本の判斷に於ては、普遍的妥當性を要求し、洞察力ある人は、必ずその樣に判斷する事を確信するという矛盾を犯している。一體、普遍的價値への信賴は、單なる欺瞞に過ぎないのであろうか。第二次大戰以來の狀況は、人々をして、益々正義の觀念に疑惑をいだかしめるに役立つている。勝者が常に正義を、我物として主張し得る結果、强者に適合する事が人々の唯一の規範となる傾向がある。併し哲學は、彼の行爲に內在的秩序を齎すべき價値を明にする任務を持つている。之と同樣に、經濟哲學も、經濟倫理學を通じて、經濟の有意義な構成の原理を設定する義務を有する。そもそも人は理性によつて、自らの生活を構成してゆく上に於る、本質的イデーを理解する。此の能力に基いて、自由、責任の意識が發生し、人格の概念も定立される。此の樣な人格は、經濟的行爲に於ても、單に利己的に行爲するのみならず、人間の搾取に反對し、又動物の酷使にさえも異議を申立てるであろう。財の浪費に反對する態度も、決して單に、節約利益の問題にのみ歸する事は出來ない。社會的な經濟計畫の擔當者も、必ず、斯る理念を持つて國民經濟の構成に從うのである。併しその理念を現實化する爲には、その價値基準は、具體的な內容を持たねばならぬ。乃ちイデーは、理想化され、イデオロギーとして具體的に表明される事となる。併し、凡ゆる理性的人間にとつて意味ある、理想的經濟構成を知る事は不可能であり、我々は只、その根本的形式を論じ得るにすぎない。斯るイデオロギーが、現實に對して態度を取り、それを變革する動力となる。併しイデオロギーを貫徹せんとする事は、常にその敵對者を表面化させる結果を生み出す。此の敵對關係を超克してゆく處に、倫理的な意味に於ける經濟的進步の道がある。經濟倫理學は、此の道の理解を廣め、イデオロギー的對立を處理してゆく任務を有するのである。

×　×　×　×　×

經濟政策學者として名を聞く事久しい、シャックの論文の梗概を、右に於て紹介したのであるが、それに關して若干の感想を述べて見度い。經濟政策學を取扱う上に於て之を單に技術的な、手段の學と見做す立場は、經濟學や社會學から自らを區別する基準がなくなり、斯學の自己否定に陷る危險を持つている。又、假說的に一應の目的を定める立場は、時流に棹さしてその時々の傾向を前提とする以上、之も極めて不徹底な、非自主的なものに成り終る怖れがある。此の事から、經濟政策學を否定するようになる論者も生じて來るし、一方では、經濟政策というものに當然終始つきまとうところの價値の問題を、社會哲學的に究明してかかろうとする方向に向う論者も出て來るのである。シャックは、技術論的立場から出發し、或る意味では尙其れを拔け出していない人であるが、經濟政策に於ても價値的態度が常に對立している樣相に目を向け、現實に於て、經濟を單に、悟性的、合理的、手段的範疇に於て理解する事が極めて限局的な意味しか持ち得ず、又經濟政策を取上げる場合に於て、當を得ていない點に注目した結果、技術論的經濟政策學より踏み出して、一つの特殊な世界に入り込もうとした。之が、

經濟哲學の根本問題

彼の〝經濟哲學〟の世界なのである。此の論文が、單なる目論見書の態を出ない事、又獨逸の一部の學者に於て甚だしい〝命名學的〟或は、〝形式社會學的〟不毛性を他分に有している事は一讀して直ちに氣付く處であるが、彼が何故斯る世界を求めたかという事は、單に無視すべき問題ではないと私には思われる。

彼が、經濟政策の純手段的取扱から目を離し、又、經濟政策の歷史的樣態に關聯をもつ、經濟樣式（スティル）論には、極めて近づきつつも之に立入る事なく、經濟倫理學を含む經濟哲學というものを主張しようとした動機は、一見容易に理解出來るように思われるが、實は、きわめて複雜な問題を含んでいるのである。一體、彼が、經濟哲學、經濟倫理學というものを考えるのは、積極的な價値原理を〝主張〟する場合の根據を求めてのことであろうか。この問は、否定的に答えらるべきである。論文の最後のところで、彼は、現實的なイデオロギーの問題に觸れ、價値の對立を超克するところに倫理學の課題があるかの如くに論じてはいる。併し、そこでも論議の重點は、價値の對立を〝理解〟する點に置かれているのであり、イデオロギーを取上げる際にも、個々の具體性そのものを問題にしているのではなくて、そのような具體的な姿をとつて現れる、〝普遍的なもの〟を問題にしていることが、うかがわれる。

彼の形態學中心の、理解主義的體系全體からみれば、このことは一層明瞭である。

そうであるとすると、彼は價値對立の理解ということと、その對立の和解ということとの關係について、更に明らかにする義務を負うことになる。彼は、人間が常に相爭つている、不完全な存在であるという〝運命〟を互に認識しあうところに倫理性がうまれるように論じているが、理解することと、和解に導くという態度とは、次元を異にするものである以上、この說明だけでは納得し難いものがある。

又、彼の立場が、ある價値原理を、〝主張〟しようとするものではなく、〝經濟一般〟の內部に存在する倫理性を認め、これを〝理解〟するにとどまるものであるとするならば、それはそれとして首尾一貫したものにはなるかも知れない。しかしこの場合には、彼の〝經濟哲學〟の體系が、どれだけの現實的意味を有するかということが、あらためて問題にされてよいのではないだろうか。

社會經濟的現實と、人間の價値的態度の關係に目をむけて、其處に問題を求める行き方には、三つの大きな流れがある。一つは、社會哲學的に價値を主張し、それによつて、現實の社會經濟的制度にたいして、一定の立場をとろうとする倫理主義の立場であり、（その一例としては、F. H. Knight, Freedom and Reform 1947 がある。）第二は、諸々の價値理念が、現實の經濟的政治的要請に、どのように結びついてきたかという點、イデーと現實との間にある、きわめてプラグマティックな意味における、歷史的具體的關係を理解するという立場（イデオロギー批判）、第三はマルクシズムの立場である。

彼の、經濟哲學の意味するところのものが、之等三つの立場のいずれにも屬さないとすれば、それは實際上、いかなる意義をもつ業績を示し得るのであろうか。われわれの疑問は、この點に集中されてくる。之に對する解答が、彼の今後の著述において、現實的になされることを、私は期待したいと思う。

（完）

編集後記

「朝鮮戰爭の早期解決」の看板で大統領になつたアイゼンハッアーが宣言した、外交政策中、中國海上封鎖と蔣政權の中立解除（イコール本土進攻）は英國はじめ歐洲方面の御氣げんを損じたため、どうやら蜃氣樓的現象となり、國際間の「密約破棄」という勇敢なかけ聲も最近では「曲解した解釋や適用を一切認めない」という後退的表現に轉化してしまつた。彼の外交政策を彼自身「一貫性ある、確信に滿ちた」ものと呼んでいる。「一貫性」と轉化の二律背反を、彼がいかなるロジックで統一しているかは知る由もないが、「確信に滿ちた」という表現が示す意慾だけは認めてもよさそうである。

ダレス國務長官は、「歐洲防衛共同體制」の促進に熱中し、軍事・經濟援助という傳家の寶刀を拔いて、七十五日の期限付きで、關係各國にイエス・ノーを迫つた。「人の噂」の有效期限一ぱいの坐り込み戰法である。

ダレスは四、五月頃日本を再訪すると傳えられるが、この情勢を迎える吉田首相は「再軍備を强いたり、朝鮮へ兵隊をもつていくような、世論が承知しないことを要請することはないと思う」（二月六日衆院豫算委員會）と事もなげにいう。「併し、アメリカの外交政策は明らかに……」などと反問しようとすれば、いきなり「默れッ！」と來そうな空模樣である。

ようやく、ほころびかけた雷も散り、心も凍る思いである。しかしわれわれの分野である、眞理探究の火は國と民族のあるかぎりえんえんと燃え續けるであろう。（植木憲二）

昭和二十八年二月二十五日印刷
昭和二十八年三月　一　日發行
第四十六卷　定價　七拾圓
第三號　送料　四圓
編輯兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部內　高村象平
印刷所　東京都港區芝三田豊岡町八　図書印刷株式会社　川口芳太郎
豫約購讀料
一年分　金八四〇圓（送料共）
半ケ年分　金四二〇圓（〃）
發行所　東京都港區芝三田二丁目　慶應義塾大學經濟學部研究室內　慶應義塾經濟學會